

この子たちなら大丈夫？

校長は検食をしなければならぬので、皆さんが給食配膳や手洗いをしているときに、私は給食を摂っています。

昨日は検食を急いで済ませ、久しぶりに配膳や手洗いの様子を見せてもらいました。三年生の教室のある二階に上がろうとした時に、多くのしゃべり声が私の耳に届きました。違和感を感じながら手洗い場を見ると、正直言ってがっかりしました。密にならないように、グループごとに時間差をつけて取り組むはずだった手洗いです。密の状態こそありませんでしたが、そこには大きな声でしゃべりする三年の生徒が多くいました。トイレからも大きな声を出して出てくる生徒を見かけました。廊下を見ると、感染症対策を忘れてしまったかのようにおしゃべりしたり、くっつき合ったりしている姿、廊下を駆け回る姿がちらほら……。

「のど元過ぎれば、熱さ忘れる」という言葉があるように、感染予防に対する意識が、多くの生徒から消えつつあるように見えました。感染の危機はまだまだのど元を過ぎていない状況であるのに、「もう大丈夫だ」と安心しきっているのでしょうか。中学生であれば、日本が、岐阜県が、そして、瑞浪市がどういう状況であるかぐらいは把握していてもおかしくありません。恐らく、新聞にもテレビニュースにも触れていないのかもしれないですね。

がっかりしただけではありません。この日常の様子から判断すると、「特別なことはできない」と判断せざるを得ないと考えました。新型コロナウイルス感染がなければ、五月の今頃に宿泊体験学習の東京研修が計画されているはずですが、恐らく一学期の東京研修の実施は無理だろうと考え、今年度は早々と変更をしました。義務教育最後の年に楽しい思い出を何としてでも作って卒業させたかったからです。

心配なのは、ウイルスだけではなく、ウイルスから自分たちを守ろうとする意識が薄れつつある生徒たちに、不安が生まれました。「何としてもこの子たちに楽しい思い出を」という思いにも、今後陰りが生まれるかもしれないですね。

「いい子にしていけないと、連れていかれない」と幼な子に対する戒めのようにには取らないでください。私は校長として行かせたいと強く思っています。そのために、時期と行き先を変更したのです。しかし、それは生徒たちの感染予防の意識が高くないと実現できません。それを本気で考えてもらいたいです。

三年の様子を確かめた後に、二年、一年の様子も見に行きました。三年生の皆さん、客観的に見て後輩たちの方がはるかに感染防止の意識は高いようです。「この子たちなら連れて行って大丈夫！」そう思えるように、三年生の奮起を期待します。